

ゴルギアス『あらぬものについて』の矛盾

木下 昌巳

Masami KINOSHITA

本稿の目的は、ゴルギアスの『あらぬものについて』の第一部に認められる矛盾の性格を検討し、この作品とゴルギアスの他の弁論的作品の共通性をあきらかにすることである。

1

ゴルギアスの『あらぬものについて (περὶ τοῦ μὴ ὄντος)』と題された著作は、ゴルギアス自身によるオリジナルは現存しないが、その内容の概要は、セクストスによる要約とアリストテレスの著作として伝えられてきた、ペリパトス派の人間の手になると考えられる『メリッソス、クセノパネス、ゴルギアスについて』（以下、MXGと省略）と呼ばれる著作のなかに含まれている要約から知ることができる¹⁾。『あらぬものについて』のなかで、ゴルギアスは、(1) 何もあらぬ、(2) もし何かがあったとしても、それを知ることはできない、(3) もし何かを知ることができたとしても、それを他人に伝えることはできない、という三つの命題を証明しているとされる。本稿で直接に取り上げるのは、最初の「何もあらぬ」という命題にたいする証明のなかに認められる問題である。セクストスによれば、ゴルギアスはこの命題を次のような仕方で証明している。もし何かがあるとすれば、それは、1, あらぬものであるか、2,

1)Diels-Kranzは、セクストスの要約だけを82B3として載せている。

とによって、何もあらぬという結論が導かれる。その初めにくる「あらぬものはあらぬ」という命題を証明する議論は、以下の如くである。

καὶ δὴ τὸ μὲν μὴ ὄν οὐκ ἔστιν. εἰ γὰρ τὸ μὴ ὄν ἔστιν, ἔσται τε ἅμα καὶ οὐκ ἔσται· ἢ μὲν γὰρ οὐκ ὄν νοεῖται, οὐκ ἔσται, ἢ δὲ ἔστι μὴ ὄν, πάλιν ἔσται. παντελῶς δὲ ἄτοπον τὸ εἶναί τι ἅμα καὶ μὴ εἶναι· οὐκ ἄρα ἔστι τό μὴ ὄν.

καὶ ἄλλως, εἰ τὸ μὴ ὄν ἔστι, τὸ ὄν οὐκ ἔσται. ἐναντία γὰρ ἔστι ταῦτα συμβήσεται τὸ μὴ εἶναι. οὐχὶ δέ γε τὸ ὄν οὐκ ἔστιν· <τοῖνυν> οὐδὲ τὸ μὴ ἔσται.(67)²⁾

「あらぬものは、あらぬ。なぜなら、もしあらぬものがあるとするれば、それは、あるものであると同時にあらぬものとなるからである。というのは、それがあらぬものとして考えられる限りにおいては、それはあらぬのであり、あらぬものとしてある限りにおいては、あるのである。そして、このことは、まったく不合理である。それゆえ、あらぬものはあらぬ。

このことは他の仕方でも証明される。もしあらぬものがあるなら、あるものはあらぬという帰結を導く。というのは、この二つのものは、互いに反対のものであるからである。そして、もしあらぬものがあるという性質を持つならば、あるものはあらぬという性質を持つことになるだろう。しかし、あるものがあらぬということはない。それゆえ、あらぬものはあらぬことになるだろう」

このセクストスの要約によれば、ゴルギアスは、「あらぬものはあらぬ」という命題を二通りの方法で証明していることになる。この証明は、両方とも背理法を用いたものである。最初の議論では、もし「あらぬものがある」と仮定すれば、「あるもの」が同時に「あるものである」と「あらぬものである」という互いに相容れない述語をもつことになる。これは不合理である。第二の議論では、第一の議論と同じ仮定から、「あるものがあらぬ」というもう一つの不合理な命題が引き出される。この二つの議論は両者とも、最初の仮定「あらぬものがある」という命題が成り立たないことをしめしている。このことから、

2)テキストはBuchheimによる。

「あらぬものはあらぬ」という結論が導かれる。

私がここで直接に問題にするのは、ここで述べられている二通りの証明のうち第二のものである。この議論によって導かれた不合理な帰結は、「あるものがあらぬ」という命題である。この命題がなぜ不合理であるかと言えば、セクストスがはっきりと述べているように、「あるものがあらぬということはない (οὐχὶ δέ γε τὸ ὄν οὐκ ἔστιν)」からである。この命題は、それだけ見れば、自明であると感じられる。しかし、ゴルギアスは、この直後に、「あるものはあらぬ」という命題を入念に証明しているのである (68-74)。この命題は、「何もあらぬ」ということをしめす『あらぬものについて』の第一部の核心となるものであり、ゴルギアス自らの主張として正式に表明されているものである。しかし、この「あるものはあらぬ」という命題は、二番目の証明のなかで自明な命題として用いられている「あらぬものがあらぬということはない」という命題とあきらかに矛盾する。だとすれば、ゴルギアスは、この議論において「あるものはある」という命題を自明な前提として使用することはできないはずである。ゴルギアスは、なぜこのような議論をすることができたのだろうか？

Kerferdによれば、この矛盾は、1828年にFossによって初めて指摘された問題である³⁾。それ以来、論者たちは、この矛盾を逃れるためにさまざまな解釈を提出してきたが、そのなかでもっとも一般的な解釈はGigonに代表されるものである⁴⁾。彼は、このような問題が生じるのはセクストスがゴルギアスの議論を誤解していることに起因しているのであり、ゴルギアス元来の議論においては、このような難点は生じないと考える。このような解釈の根拠となるのは、MXGの対応箇所である。その部分は以下の通りである。

εἰ δ' ὅμως τὸ μὴ εἶναι ἔστι, τὸ εἶναι, φησί, οὐκ ἔστι, τὸ ἀντικείμενον. εἰ γὰρ τὸ μὴ εἶναι ἔστι, τὸ εἶναι μὴ εἶναι προσήκει. ὥστε οὐκ ἂν εἴη οὐδέν, εἰ μὴ ταῦτόν ἐστιν εἶναι καὶ μὴ εἶναι. (979a30-32)⁵⁾

3) Kerferd (1), p.15.

4) Gigon, p.195.

「逆に、もしあらぬものがあるならば、あらぬものと相反するものである、あるものはあらぬことになる。なぜなら、あらぬものがあるならば、あるものはあらぬことになるからである。それゆえ、もしあるものとあらぬものが同じものではないならば、何もあらぬことになるだろう」

この箇所からだけでは、セクストスとの違いはわかりにくいだが、MXGの筆者自身がこのすぐ後でこの議論にたいして加えている批評から、彼がこの議論をセクストスとはまったく違った仕方で理解していることがわかる⁶⁾。MXGの筆者は、この議論を以下のように理解している。もしあらぬものが存在するならば、「あらぬもの」の反対物である「あるもの」は、存在しないことになる。そして、「あらぬもの」は、その定義によって存在しない。何かがあるとすれば、「あるもの」と「あらぬもの」のうちのいずれかである。しかし、そのいずれも存在しないことがあきらかになったので、何も存在しないということになる。セクストスは、この議論を背理法を用いて、「あらぬものはあらぬ」という結論を導く議論として解釈していた。それにたいして、MXGの筆者は、この議論を背理法によるものと捉えていない。それに加えて、この議論によって導かれる結論も「あらぬものはあらぬ」ということではなく、それを含意するより大きな命題「何もあらぬ」(οὐκ ἄν εἶη οὐδέν) という命題であると考えている。セクストスが不合理な結論として提示している τὸ ὄν οὐκ ἔσται という命題は、MXGにおいては τὸ εἶναι οὐκ ἔστι という表現で現れるが、MXGでは、この命題は、導かれるべき結論の役割を果たしているのである。実際、セクストスの背理法による議論のなかで自明の前提とされていた「ある

5) テキストは Buchheim による。

6) 「そして、もし端的な仕方で（あらぬものがあると）言うことが正しいとしても、（あらぬものがあるということは、非常に驚くべきことであるかもしれないが、それが可能であるとするならば）、すべてのものがあるのではなく、あらぬというようになるだろうか。というのは、もしそうなら、それとはまさに反対のことが生じられるからである。というのは、もしあらぬものがあるものであり、あるものがあるものであるならば、すべてのものがあることになるだろう。というのは、あるものもあらぬものもあることになるからである。なぜなら、もしあらぬものがあるとしても、あるものがあらぬということは、必然ではないからである」（MXG, 979b7-10）。

ものがあらぬということはない (οὐ τὸ ὄν οὐκ ἔστιν) 」という命題は、MXGには現れない。

前世紀においては、『あらぬものについて』に関する資料としては、もっぱらセクストスが参照され、それに比べてMXGのほうには目が向けられなかった⁷⁾。しかし、Gigon以後、近年の論者たちの多くは、ゴルギアスの資料としてセクストスよりもMXGのほうを重要視する傾向にある⁸⁾。ここで注目すべきは、論者たちがセクストスよりMXGを高く評価しようとする根拠である。彼らに共通しているのは、ゴルギアスは哲学的批判に耐えるような意義のある議論をおこなっているはずだという想定である。つまり、ゴルギアスはセクストスの要約に見られるような稚拙な議論をしているはずがないので、セクストスはゴルギアスの議論を正しく映し出していないと推論するのである。しかし、Loenrenが指摘しているように、このような想定にたいする文献学的な根拠は稀薄である⁹⁾。彼らがMXGのほうを重要視する理由の一つとして、MXGのほうにセクストスよりもゴルギアス自身の言葉が正確に引用されているということがある。しかし、その根拠は、ゴルギアスの議論が「～とゴルギアスは述べている (φησίμ) 」という仕方で述べられているということにすぎない。しかし、このことは、きわめて怪しい想定であると思われる¹⁰⁾。セクストスの要約とMXGの要約の間には、多くの点で相違が認められるが、その相違は、いま問

7)Diels-Kranzは、セクストスのみを載せ、MXGを含まないことは、この事実を反映している。

8)Gigon, p. 188ff.; Verdenius, p.75, n.4:"it may now be taken for granted that as far as historical reliability is concerned this source is far superior to Sextus."; Kerferd (2), p. 96:"For the first part of the treatise it is probable that the text of *De MXG* is a more faithful representation of the original than the version given by Sextus." ; Newiger, p.21ff.

9)Loenren, p.178, n.7:"one should not forget that this view is hardly based at all on philological considerations.---The reason for this preference for *MXG* is clearly that he is assumed to have understood Gorgias than Sextus. Thus the real criterion actually is the interpretation."

10)Nestleは、文献学的見地からMXGよりもセクストスに信頼性を与えている (p.555)。SolmsenもMXGよりもセクストスのほうを評価して、以下のように述べる。"I continue to have more confidence in the version of Sextus, which includes fewer critical or other comments and preserves something of Gorgias' sprightly style." (p.10).セクストスを擁護する者として他に、Loenren(pp.179-180), Barnes (p.173)。

題にしている「何もあらぬ」ということを証明する第一の議論の前半部分においてもっとも顕著である。この部分にかんしてMXGのほうを尊重しようとする論者たちの根拠は、セクストスに発見できるような一見して誤りとわかるような議論をゴルギアスがしているはずがないということにある。このことは、Gigonの次の言葉に端的に見ることができる。"In demselben Kapitel, in dem die Nichtexistenz des Seienden zu beweisen ist, mit der Existenz des Seienden als Gegebenheit zu operieren, halte ich auch für Gorgias für unmöglich. Gehen wir auf MXG zurück, so erweist sich dieser Satz als Zutat des Sextus."¹¹⁾つまり、彼らの解釈は、ゴルギアスの議論から積極的な哲学的意義を見いだそうとする解釈者の側にある姿勢によって支えられていると言うことができる¹²⁾。

しかし、Kerferdが論証しているように、セクストスとMXGが提示している議論の内容は、見かけほどの大きな差異はなく、その内容は実質的には同じものであると思われる¹³⁾。Kerferdは、MXGに欠けている「あるものがあらぬということはない (οὐ τὸ ὄν οὐκ ἔστιν)」という命題は、明示的に語られていないだけで、MXGにおいては、この命題を補って理解しなければならないと主張する。つまり、MXGの議論も、セクストスの議論と同様に、背理法によるものであることになる。私には、この解釈は無理のないものであると思われる。もしこのような仕方では、MXGのなかにセクストスと同じ議論を見いだすことができるのであれば、しいてMXGのなかにセクストスとは別の議論をゴルギアス元来の議論として求めるよりも、セクストスの要約はゴルギアスの議論を映し出していると考えようがずっと自然である。しかし、その場合、セクストスのなかに指摘された問題は、MXGにも共通な問題としてそのまま残ることになる。そして、このことは、この問題が解釈者の誤りに起因するものではなく、ゴルギアス元来の議論にすでに含まれていたものであるということ

11)Gigon, p.195.

12)現在のところ、『あらぬものについて』にたいするもっとも細密な研究であるNewigerもこのような態度を踏襲している (pp.30-33)。

13)Kerferd, p.16:"If we say that it is possible to for things not to be -- εἰ τὸ μὴ εἶναι ἔστι -- this lead us to the assertion that that which is is not, which is contradiction and so impossible." 他にMXGの議論を背理法によるものと解釈する者として、Untersteiner, p.146, Bröcker,

p.431, Sicking, p.228.

を意味している¹⁴⁾。

Kerferdは、この議論が背理法によるものであることを認めたくて、ゴルギアスがここで論じているのは、事物の存在にかかわる問題ではなく、否定的な述語を用いることは必然的に矛盾を引き起こすというプレディケーションにかかわる問題であると主張する¹⁵⁾。そうのように考えれば、ゴルギアスが「あるものはある」という自明と思われる命題を否定していると考えする必要はなく、彼がこの議論のなかで、「あるものがあらぬということはない」という命題を議論の前提として使用することは、何ら不都合ではないことになる。しかし、もしゴルギアスがこの議論で扱っている問題が存在にかかわるものでないとなれば、この議論は、『あらぬものについて』の他の部分とのつながりをまったく失ってしまうだろう。『あらぬものについて』の第二部では、第一部の結論「何もあらぬ」ということを引き継いで、「もし何かがあるとしても、それを知ることはできない」ということが論じられる。ここに含まれる「もし何かがあるとしても」という条件は、「もし何も存在しないとしても」ということ以外のことを意味しえないと思われる。だとすれば、第一部で語られていたことも、存在の問題でなければならぬはずである。Kerferdは、この難点にたいして有効な説明を与えていない¹⁶⁾。ここでKerferdの解釈について深く立ち入ることとはしないが、私が強調したいのは、彼がこのような解釈をする背後には、あ

14)もしセクストスの要約は誤りであり、MXGの要約のほうがゴルギアスの議論を正確に伝えているとしても、その場合にはまた別の困難が生じる。すでにMXGの筆者がこの議論にたいする批評のなかで指摘しているように、この議論から望まれる結論は導かれられない。もしあらぬものがあるとしても、そのことがあるものの存在を否定することにはならない。さらにもしそのことを認めたとしても、あらぬものはあると仮定されたのだから、あるものの存在がそれによって否定されたとしても、あらぬものはあることになる。つまり、この議論からは、「何も存在しない」という結論は得られないのである(MXG, 979b5-12参照)。この難点は、セクストスにおいて認められた困難に劣らず明白で大きなものである。MXGを重要視する論者たちも、この事実を認めて、セクストスだけでなくMXGの筆者もゴルギアスの議論を誤解しているとしたうえで、セクストスよりもMXGを重視して、後者からゴルギアス元来の議論を読み取ろうとするのである(たとえば、Newiger, pp.30-33)。しかし、このような解釈は、文献学的根拠が薄弱であるかぎりにおいて、恣意的であると思われる。

15)Kerferd, p.16:"what he is saying that the verb "to be" cannot be used of phenomena either positively or negatively without contradiction resulting. If it is realized it become possible to approach the arguments both Sextus and MXG."

16)Kerferdの解釈にたいする批判については、とくにSicking, pp.245-247参照。

る想定が存在するということである。彼は、さきに見たMXGの筆者の批判に言及しながら、次のように述べる。"This is a valid criticism of the argument of Gorgias as stated by the author of MXG, and it is so obvious that it is difficult that Gorgias would not have seen it?" つまり、Kerferdがこの議論によって扱われているのは存在の問題ではなくプレディケーションの問題であるという解釈に立ち至るのは、もしそこで存在にかかわる問題が扱われているのならば、その議論はまったく稚拙なものであり、ゴルギアスがそのような議論をしているはずがないということによる。Kerferdの解釈は、ゴルギアスは哲学的に有意義な議論をしているはずだという想定に基礎づけられていると行うことができる。このような想定は、さきに見たGigonの想定と共通するものである。つまり、GigonがMXGの要約を尊重するのも、Kerferdがこの議論で問題にされているのは存在の問題ではないと考えるのも、その基礎には、ゴルギアスが何らかの哲学的に有意義な議論をおこなっているはずだという想定によって支えられている。この想定が誤りであるという直接的な根拠は存在しないが、このような想定にもとづく彼らの解釈は、ゴルギアスの議論の矛盾を十全に説明することに成功していないと思われる。私は、この想定を放棄することによって、この問題をより説得的に説明することができると思う。

2

ゴルギアスの作品として、『あらぬものについて』のほかに、『ヘレネ頌』(DK82B11)と『パラメデスの弁明』(DK82B11a)と題された二つの弁論的な作品が完全な形で現存している(以下、それぞれ『ヘレネ』、『パラメデス』と呼ぶ)。私は、この二つの弁論に目を向けることで、『あらぬものについて』に見られた問題にたいする一つの回答が得られると考える。

この二つの弁論は、両者ともトロイア戦争時代のエピソードに題材を求めたものであり、前者は第三者によるヘレネという女性にたいする弁護という形態をとり、後者はパラメデスという人物が自ら語る弁明というかたちをとった架空の弁論である。一般に、トロイア戦争はスパルタの王メネラオスの妻であるヘレネ女性がトロイアの王子パリスのもとに向かったことに起因すると考えられ、ヘレネはトロイア戦争の元凶として人々の怨嗟の対象となっている。『へ

レネ』の目的は、このヘレネという女性を人々の非難から弁護することにある。ゴルギアスは、ヘレネがパリスのもとに奔った理由として考えられることがらとして、神の力、暴力、言葉による説得、エロスの力の四つを挙げる。そして、この四種類の原因をひとつひとつ順に取り上げ、ヘレネのおこないの原因がそのいずれであったとしても、それは強制的なものであり抵抗不可能であったのであるから、その行為の責任をヘレネに帰することはできないのであり、彼女を非難することは不当であると論じる。この議論が説得的であるか否かは、次の二つのことがらにかかっている。まず第一に、挙げられた四種類の原因それぞれについて、その場合にヘレネにたいして働いた力が強制的なものであることが説得力ある仕方でしめされなければならない。第二に、この四種類の原因は、ヘレネの行為の原因として考えられることがらをすべてを網羅的に尽くしたものでなければならない。しかし、以下に見るように、ゴルギアスは、このどちらについても、その要請を果たしておらず、むしろ自らすすんで放棄している。

まず、第一の点にかんして以下のような疑問がわく。ゴルギアスが挙げている四種類の原因のうち最初の二つのもの、すなわち神の力と暴力がヘレネの行為の原因だとすれば、彼女に罪がないということに異論は出にくいであろう。この二つのことがらは、いずれも人間にとって強制的なものとして働くということに、誰も異論を唱えないと思われるからである。しかし、後の二つのもの、言葉による説得とエロスについては、それらが強制的なものであるということは、かなる受け入れ難い主張である。もしパリスがヘレネを言葉によって説得したとしても、ヘレネがパリスにたいして恋心を抱いたとしても、あるいはその両方であったとしても、彼女がトロイアに向かったときに、ある時点で、その行為を選択するための彼女自身による決断があったと考えられる。その際にかかわらず、自分の行為にたいする道徳的判断、あるいはその行為が周囲にもたらす影響についての判断がおこなわれたはずである。ヘレネはこのような判断に主体的にかかわったのであるから、その行為にたいして彼女に責任を問うことは妥当であると思われる。ゴルギアスは、言葉とエロスは人の心をあらがい難い仕方で捉えるので、神の力や暴力が原因である場合と同じように、ヘレネの行為の選択にはこのような要因が入り込む余地がなかったと主張するのであ

る。しかし、ゴルギアスがその根拠として挙げていることは、言葉とエロスは人の心に強烈な感情を引き起こすという誰もが知っている経験的事実にすぎない(8-19)。また、もしヘレネにたいするゴルギアスの弁護を妥当なものとして認めれば、ここで語られていることがらには、ヘレネの事例に限らず、すべての姦通という行為にも当てはまるであろうから、『ヘレネ』で語られている立場からすれば、姦通という行為一般の罪を問うことはできないことになるだろう。ゴルギアスは、このような極端な主張を可能にするような何か心理学的立場を保持していたのだろうか。

しかし、『パラメデス』に目を向けるとき、このような心理学的な立場をゴルギアスに帰することができないことがわかる。ゴルギアスは、この作品のなかで、『ヘレネ』における主張とは相容れない立場から議論をおこなっているのである。『パラメデス』は、トロイア方への内通しているとオデュッセウスによって告発をされたパラメデスが、自らにかけられた嫌疑を晴らすために語る弁論という体裁で書かれている。そのなかで、パラメデスは、彼がおこなったと疑われている裏切り行為にかんして、そのような行為は現実的に実行不可能であったことを述べた後で(6-12)、もしそのような行為をなすことが可能であったとしても、彼にはそのような行為を実行するだけの十分な動機が存在しないことを説明する。彼は以下のように述べる。ある者は、彼が支配欲、名誉欲、金銭欲からギリシャ方を裏切る行為をなしたと思うかもしれない。しかし、このような行為は、彼のような立場にある者にとって、けっして引き合う選択ではない。欲望の奴隷となっているような人間ならば、欲望に駆られてそのような行為をなすかもしれないが、自分はしいてそのような行為を選択するほど貪欲な欲望の持ち主ではない。このことの証拠としてパラメデスが挙げていることがらには、注目に値する。彼は、自分が貪欲な欲望の持ち主ではないことをしめすために、自分の過去の生き方に目を向けてくれるよう求めている¹⁷⁾。このことは、行為者の習慣や性格がその者の行為を決定する大きな要因をなして

17) 「私が真実を語っていることの証拠として、私のこれまでの生き方を説得力ある証人として提出したい。そして、あなたがたは、この証人を支持する証人なのだ。なぜなら、あなたがたは、いつも私とともにいたのであり、そのことをよく知っているのだから」(『パラメデス』(15))。

いるとゴルギアスが考えていることをしめしている。しかし、『ヘレネ』で述べられていることは、このような根拠を無効にすると思われる。『ヘレネ』に含まれるエロスにかんする議論のなかで、相手の肉体を目にすることがどれほど強制力のもつものであるかをしめすために、以下のように語られる。「視覚が、敵の肉体と敵の武器についている銅や鉄の装備（そのあるものは防御のためであり、あるものは攻撃のためである）をとらえると、即座に振動し、魂をも震わせる。その結果、人々は、しばしば、未来の危険がすでにもうここにあると考えて、驚いて逃げてしまうのである。というのは、法を守るよう強く習慣づけられているとしても、そのような習慣は、視覚から生じた恐怖によって消されてしまう。そのような視覚がやってくると、それは法によって判定される立派なことにも勝利から得られる善きことにも意を払わないようにさせるのである」（16）。ここでは、いかに強固に形成された習慣であったとしても、外部からの働きによって、それは簡単に無効なものにされると主張されていると思われる。このことは、『ヘレネ』の主張にとっては重要である。もし習慣の強弱によって、人の行為の選択が左右されるならば、そこにヘレネの責任を問う余地が生まれることになるだろう。しかし、もしゴルギアスが習慣が人の行為の選択を決定しないと考えているならば、パラメデスが自らの過去の生き方を根拠として、裏切り行為をなしたことを否定していることは、ゴルギアス自身にとって説得力をもたないことになるであろう。『ヘレネ』で言われている強力な敵を目前にした生命の危険が迫っているような状況とパラメデスが置かれていた理性的判断が可能な状況とはおのずから異なるのであって、『ヘレネ』で言われていることがすぐに、パラメデスの主張を無効にしないという反論があるかもしれない。しかし、このことが事実であるとしても、ゴルギアスの議論は、このような反論を認める仕方で語られていない。彼は、強固な習慣も容易に守られなくなることを強調し、彼の挙げている例が極端な状況におけるものであるとしても、そこで言われていることはすべての場合に当てはまることとして語っているからである。『ヘレネ』の主張を厳格に受けとめるならば、人がある行為をなしたこと（なさなかったこと）の根拠として、その人の習慣や性格を根拠として提出することは、一般に不可能になる。このように、ゴルギアスは、『ヘレネ』と『パラメデス』においては互いに相容れない前提のも

とに議論を展開していると言わなければならない¹⁸⁾。

『ヘレネ』の議論が有効であるために満たされなければならないもう一つの条件、ヘレネの行為の原因として挙げられている四つのことながらその可能性をすべて網羅的に尽くしたものでなければならない、ということについてはどうであろうか。ゴルギアスは、この四つの原因をそのようなものとして提示しているように見える¹⁹⁾。しかし、『ヘレネ』の議論を注意深く見るとき、ゴルギアスが挙げられている四種類の原因以外にも行為の原因がありえたことを（おそらくは、はからずも）認めていることが読み取れる²⁰⁾。言葉を用いた説得にかんして論じた箇所で、次のように語られる。「ほとんどの者が、ほとんどのことにかんして、ドクサを魂の導き手として用いるのである。しかし、ドクサは、うつろいやすく、確実なものではないので、それを用いる者をうつろいやすく不確実な幸運へとしか導かないのである」（11）。ゴルギアスはここで、ある行為の選択には行為者の（ドクサによる）判断という要因が存在すること、そして、その行為者の判断が適切ではなかったために、ある行為が望ましくない結果をもたらす場合があることを認めているように見える。これと同じことは、後の（19）節のなかの次の言葉のなかに、よりはっきりと認めることができる。「彼女がトロイアに至ったその理由は、知識の配慮によるのではなく、魂が捕らえられていたことによるのであり、そして、エロスの強制によるのであり、技術による企みによるのではない。」ここで、「知識の配慮」と「技術による企み」ということが「エロスによる強制」と並べて語られていることから、ゴルギアスは、「知識の配慮」や「技術による企み」によってなされた誤った行為が存在する可能性を認めていることがわかる。もしある望ましくない行為の原因がその行為者の判断の誤りにあるのなら、その行為者にたいする責

18) Adkins, pp118-119. この部分の記述にかんしては、Adkinsに多くを負っている。

19) 「彼女があのような行為をなしたのは、偶然の欲するところと神々の考えと必然の命じるところであるか、強制的に拉致されたのであるか、言葉によって説得されたのであるか、視覚によって激しい欲求に駆られたかのどれかによる」（『ヘレネ』（6））。「彼女がなしたことをなした理由が、エロスによるものであれ、言葉によって説得されたのであれ、神的な強制によって強いられたのであれ、そのすべての場合において、彼女は非難する理由はないのである」（同（20））。

20) Cf. Adkins, p.117.

任の追及は免れえないであろう。そして、このような原因がヘレネの場合には除外されると考えるべき理由は、何も存在しない。もしこのようなことを行為の原因として認めるならば、挙げられている四つの原因に加えて、「知識の配慮」の誤りということもヘレネの行為の原因の一つの可能性として検討されるべきである。しかし、実際には、ゴルギアスは、このような原因を無視している。そして、ゴルギアスが行為の選択におけるこのような要因を意識していなかったということはあるまい。なぜなら、さきに見たように、『パラメデス』においては、パラメデスは、まさにこの要因を強調することによって、彼が問題の行為をなしたことの蓋然性の低さを論じていたからである。『ヘレネ』と『パラメデス』のあいだに認められた矛盾は、この二つの作品の性格の違いによって、いくらかは緩和されるかもしれない。しかし、この難点は、『ヘレネ』という一つの作品のなかに含まれるものであり、それを解決する方法は存在しないと思われる。

以上に見たことが正しければ、ゴルギアスは、自らの主張を説得するために、その場その場で必要な前提を取り上げ、あるいは創り出して、それを恣意的に利用しているのであり、その前提のあいだの整合性にたいしては意を払われていないと考えなければならないだろう。ゴルギアスは、別々の作品のなかでは、当然の如く、必要とあれば一つの作品のなかにおいてさえ気づかれないように、相容れない前提を作り出しているのである。わたしは、『あらぬものについて』の議論のなかに認められた矛盾は、ゴルギアスの弁論的作品に見られる矛盾とまったく同じ性質のものであると考える。ゴルギアスが「何もあらぬ」という命題を証明する議論のなかで、「あるものがあらぬということはない」という前提を利用していることは、とても不可解なことであった。しかし、ゴルギアスにとっては、気づかれさえしなければ、そのような矛盾は問題にならないのであり、大切なことは、その結論の正しさを聞き手に印象づけることである。『あらぬものについて』のような哲学的著作を、『ヘレネ』や『パラメデス』のような弁論的作品とはおのずから目的が異なるのであり、これらの作品を同列に論じることはできないという反論があるかもしれない。『パラメデス』のような法廷用弁論が自らの主張を擁護するために、あらゆる方法を駆使するのは当然のことであるが、『あらぬものについて』のような哲学的議論に

においては、何よりも議論の厳密性が要求されると思われるからである。しかし、このような主張は、『あらぬものについて』が哲学的議論に何らかの寄与することを意図して書かれたものであるという解釈者の側の想定にもとづくものである。この作品がはじめからそのようなものとして書かれていると考えなければ、そのなかに発見される論理的不整合は、むしろ自然なこととして受けとめることができる。われわれは『あらぬものについて』を他者による要約のかたちでしかもたえず。そのオリジナルを知らないということは、もっと注意されてもよい。セクストスもMXGの筆者も、哲学的関心から、この作品にアプローチしている。つまり、彼らの要約は、ゴルギアス元来のテキストからその論理的骨子だけを抽出しようとしたものであり、その他の要素はできるだけ切り捨てられていると考えられる。しかし、ゴルギアスのオリジナルがもっていたスタイルは、*ἀναι*とその派生語が連続的に使われた、きわめて幻惑的なものであったことは、その要約からも見て取れる。そして、このような文章こそ、ゴルギアスがその言葉の技術を発揮する最適の場所ではなかっただろうか。『あらぬものについて』に含まれる矛盾は、セクストスの要約によってはじめて明確なものになったのであり、ゴルギアス元来のテキストにおいては、ゴルギアスのレトリックによって巧妙に隠蔽されていた可能性がある。『あらぬものについて』にたいするこのような捉え方は、けっして新しいものではない。今世紀初頭に、H. Gomperzがこの作品のもつレトリカルな性格を指摘している²¹⁾。しかし、近年の論者たちは、この作品に哲学的に有意義な議論を発見することのみ意を砕いているように見える。このような傾向は、次のLoenrenの言葉が端的に表している。"It is true that attempts have been made to eliminate thier absurd character by the assumption that to Gorigas this argumentation was merely a dialectic game without any philosophical meaning, or a parody of the Eleatic doctrine, but this view has justly no supporter now."²²⁾ しかし、この作品は「弁論家」ゴルギアスによって書かれたものであるということを忘れてはならない。

(京都大学文学部・研修員)

21) Gomperz, pp.22-26. 『あらぬものについて』の解釈史については、Kerferd(2), pp.93-95 参照。

22) Loenren, p.177.

文献表

- Adkins, A.W.H., "Form and Contents in Gorgias' Helen and Palamedes" in J.P. Anton and A. Preus edd., *Essays in Ancient Greek Philosophy*, (Albany, 1983), 107-128.
- Barnes, J., *The Presocratic Philosophers*, (London, 1982).
- Bröcker, W., "Gorgias contra Parmenides", *Hermes* 86(1958), 425-440.
- Buchheim, Th., *Gorgias von Leontinoi: Reden, Fragmente und Testimonien*, (Hamburg, 1989).
- Gigon, O., "Gorgias 'Über das Nichtsein' ", *Hermes* 71 (1936), 186-213.
- Gomperz, H., *Sophistik und Rhetorik*, (Leipzig and Berlin, 1912).
- Kerferd, G.B.(1), "Gorgias on nature and that which is not", *Phronesis* 1(1955), 3-25.
- Kerferd, G.B.(2), *The Sophistic Movement*, (Cambridge, 1981).
- Loenren, J.H.M.M., *Parmenides, Melissus, Gorgias. A Reinterpretation of Eleatic Philosophy*, (Assen, 1959).
- Nestle, W., "Die Schrift des Gorgias "Über die Natur oder über das Nichtseiende", *Hermes* 57(1922), 551-562.
- Newiger, H.-J., *Untersuchungen zu Gorgias' Schrift Über das Nichtseiende*, (Berlin, 1973).
- Solmsen, F., *Intellectual Experiments of the Greek Enlightenment*, (Princeton, 1975).
- Untersteiner, M., *The Sophists* (trans. K. Freeman), (New York, 1954).
- Verdenius, W.J., "Gorgias' Doctrine of Deception", G.B. Kerferd ed., *The Sophists and their Legacy*, (Wiesbaden, 1981), 116-127.